

monthly
JŌDO



1999

4

April

法然上人鑽仰会

テレコムしよう。



お申し込み、お問い合わせは **0088-82** (無料)

〔受付時間〕 9:00～23:00 (年中無休)

インターネットホームページ: <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は **0041**、市外電話は **0088** でテレコムしよう。

大頂寺

富士宮

寺院紀行

寺に歴史あり。

人々に信仰あり。

日本の、心の故郷を紀行する。



大頂寺第二十四世石井真也住職（左から二番目）と利子夫人（向かつて右隣）。端は寺之副住職とその若奥様の美砂子さん。下は大頂寺本堂



本尊の阿弥陀三尊。天蓋の代わりにシャンデリアが使われている



富士宮
大頂寺

富士山頂に祀られていた大日如来像



現住職真也上人が平成十一年の増上寺御忌で身につける七條袈裟と水冠は祖父が使ったものだ



明治四十三年四月二十四日、現住職の祖父にあたる第二十二世石井了覺住職が増上寺御忌唱導師をされた時のお練りの風景。奥は増上寺三門





霊峰富士と手前は富士宮市の町並み



大頂寺に伝わる徳川家からの御朱印状



かつての富士への入口村山にある浅間神社



昭和二十五年、増上寺で加行を受けていた頃の石井住職

浄土

1999/4月号 目次

カラーグラビア 寺院紀行「富士宮 大頂寺」	写真=タカオカ邦彦	3
法然上人をめぐる人々	石丸晶子	8
今月の表紙	三浦功大	15
人間の智慧と電腦の知恵	今岡達雄	16
寺院紀行「富士宮 大頂寺」	真山 剛	23
東海道五十三次を歩いて	原田 功	30
御法語に聴く	袖山栄輝	40
仏教相談	大室了皓	44
コラム 仏教歳時記		48
Jフォーラム		49
誌上句会		50
編集後記		54



表紙題字=浄土門主 中村康隆親下

表紙撮影=三浦功大

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

『書きおろし連載小説』再スタート！

法然上人を
めぐる人々
式子内親王の生涯

第一回 式子病む

石丸晶子

式子のきょうだいたち

正治二年（一二〇〇）十月某日、亡き後白河法皇の皇女式子内親王が住む大炊御門殿の御所は、日頃は人が住んでいるところとは思えぬ静寂につつまれているのに、この日は打って変わり早朝から廊を行き来する女房や下仕えの男たちの姿も慌しげに、屋敷全体が張りつめた空気につつまれていた。

それというのもこの日、仁和寺の守覚法親王と殷富門院亮子内親王の二人が、式子の病篤いと聞いて、その病床を見舞うことになったからである。

守覚と亮子と式子はともに後白河の皇子女で、しかも母を同じくする姉弟であった。

彼らの生母高倉三位藤原成子は、後白河がまだ帝位につく以前、鳥羽上皇の四宮雅仁親

王と呼ばれていた時代に、その寵愛を一身に集めた女性である。

成子は第一皇女亮子を頭に、第二皇女好子、第三皇女式子、第二皇子守覚、第三皇子以仁と、年子で順に五人の子を産み、さらに数年おいて第四皇女休子を産んだが、有力な後見者を持たず、また成子自身も控え目な女性であつたために、雅仁親王が即位して後白河天皇になるとともに、次第にその存在は宮中の力関係の中で隅に追いやられ、六人の皇子女たちはみな、幼少のうちに神仏に仕える道を歩まされることになった。

成子が産んだ皇子女たちが、なぜ早々に神仏の道へと追いやられていったかといえば、彼らが世俗にとどまっていた、皇位継承のトラブルのもとになることを、貴族社会が恐れたからである。

亮子と好子と休子は伊勢の齋宮へ、式子は賀茂の齋院へ、守覚は仁和寺へ、そして以仁

は園城寺へ。

もつとも、さいごの以仁だけは、その後みずからの定めに反抗して寺を飛び出し、還俗。やがて平家打倒ののろしをあげて、奈良へ向かう途中、平家の流れ矢にあたつて非業の死を遂げることになつたけれども。

守覚が、将来仁和寺の座主、つまり御室となるために、その中心寺院北院きたいんに入つたのは、保元元年（一一五六）の冬であつた。守覚は七歳である。

その後十一歳で出家し、若くして四円寺や六勝寺の長吏となり、五代御室で叔父覚性法親王のあとを継いで六代御室に着座したのは、嘉応元年（一一六九）の暮。守覚二十歳であつた。

このとき以来、彼は皇室の御願によつて、真言密教最高の秘法たる孔雀明王經法をはじめ数々の修法を行ふ一方、破損するに委せて

あつた仁和寺諸堂宇の修復を行い、戒律を整え、弘法大師伝来の三十帖冊子を仁和寺の経藏に納めるなど、宇多上皇によつて創建された仁和寺の充実と発展に努めてきた。

この式子のすぐ下の弟は、夙に貴族社会の内外から、学徳すぐれた仁和寺中興の人と敬愛され、六年前からは総法務に任ぜられて朝廷から綱所こうじょを賜り、今や佛教界の頂点に立つ高僧中の高僧である。

一方、第一皇女亮子が、父後白河の即位に伴つて伊勢の齋宮に卜定ぼくじやうされたのは、守覚が仁和寺覚性法親王のもとに入室したのよりも約十ヶ月早い、保元元年の春であつた。亮子は十歳である。

しかし帝位にあることわずか三年。後白河は立場の自由を求めて長子守仁もりひと（二条天皇）に位を譲り、みずからは上皇として院政をしぐことになつたのである。

そこで、天皇一代に一齋宮という原則から、

亮子は十二歳にして齋宮を退下たいげすることになったが、当時、この原則はあまり守られず、一齋宮が何代もの天皇に奉仕していることが多いのを見ると、後白河一代きりで彼女が退下したことのうちには、娘を側近くに置いておきたいという父の愛があつたのであろう。父親にとつて長女はとりわけ可愛いという例にもれず、後白河の亮子に対する愛は殊のほか深かつたのである。

その後、退下した亮子はやがて安徳・後鳥羽兩天皇の准母じふぼとなり、皇后宮に叙せられて殷富門院という女院号にょいんごうを受け、後白河亡きあととは出家して、仁和寺に近い花園殿や安井殿で暮らしている。

大きな存在であつた後白河の第一皇女亮子への、貴族社会の尊敬は深かつた。

そこで花園殿や安井殿という彼女が住む邸は、出家以前も以後も、多くの殿上人や女房が集う、華やかな文芸のサロンにもなつてい

た。

病勢暮る日々

大炊御門北おおいみかど、富小路西に位置する方一町の大炊（御門）殿で、式子が病がちになつたのは前年の正治元年（一一九九）五月からこちらのことであつた。

はじめは肩に雑熱があり、気分も氣だるくて、長年式子の側近く仕えてきた藤原定家の姉の大納言局をはじめ大炊殿の女房たちは、さほど氣にとめることもなく、

「こう雨が降りつづきますと、日頃は元氣な女房たちまでが、鬱うつとおしくて氣が減入るな」と申しております。齋院さまのお肩の熱も、梅雨が明ければ、きつとすっきりとされましよう」

などと言ひ、それでも用心のためにということとて医師が招かれ、その指示で大納言局は式

子の肩に大黃だいおうを貼ったりしていた。

式子は平治元年（一一五九）の初冬、十一歳で賀茂の齋宮に卜定され、十年後の嘉応元年（一一六九）の初秋まで、二条、六条、高倉と三代の天皇にわたって、齋院として神に仕えてきた内親王である。

そこで人々は、齋院退下後も式子のことを、前齋院さきのさいいんとか、齋院と呼ぶ。

大炊殿で式子が、邸に使える人々から呼びならわされている名も、「齋院さま」であった。

正治元年（一一九九）の梅雨が明け、夏を迎え、そして秋が訪れた。

しかし女房たちの予想に反して、肩の雑熱は退かず、あまつさえ左のひじの下には小さな腫物がいくつもふき出す始末で、病は一向によくなる気配をみせない。

正治二年（一二〇〇）の春になった。

病熱はさらに募った様子で、両脚の腫れを

ひきおこし、しつこい咳までが出るようになってきた。

医師の指示をうけた大納言局が、式子の肩と腫れた両脚に焼け石をあてると、治癒に役立つどころか、弱った皮膚は火ぶくれをおこし、その火傷のために一層病勢は進んだ様子である。

さらに梅雨に入ると脚だけでなく、大きなしこりが乳部に出来て腫れをもつようになっ
ていった。

後鳥羽上皇が、歌人たちから百首歌ひゃくしめうたを献上させる思召しを持たれ、定家なども何とかその作者の一人に加えてもらいたいと、上皇の側近にしきりと執りなし方を願ひ出ているさなか、いち早く式子に百首歌を詠進するようにとの勅命が下ったのは、そんな梅雨が明けて夏が終り、鬱そうと茂る大炊殿の樹々の隙間から、初秋の光が病間にさしはじめた頃である。

高倉天皇の第四皇子である後鳥羽は、後白河の孫にあたり、後鳥羽にとって式子たちきようだいは、父高倉天皇の異母兄姉にあたっていた。

寿永二年（一一八三）八月、後鳥羽は六歳の異母兄安徳天皇が平家に擁せられて西海に向かったあとをうけ、四歳で即位。治天の君として強力な院政をおこなっていた後白河が崩じたのは、十三歳の春であったが、その六年後にはもう、立場の自由を求めて四歳の第一皇子（土御門天皇）に譲位し、正治二年のこの当時は、院政をしいて京都政界を指導する一方、風雅の道にしたしんで和歌を愛する心深い、二十一歳の青年上皇になっていた。その後鳥羽が今はじめて、名のきこえた歌人たちから百首歌を献上させる思召しをもたれ、上皇主催の「初度百首」として、勅命を下したのである。

その勅命に応じて式子は、ひと月余りとい

う早さで百首を詠出し、秋が深まる日、院の和歌所に献じた。

ところで、その清冽にして慕情こもる百首歌に歓感あつたのであろうか、数ある皇子たちの中でも上皇の愛情もつとも深い第二皇子守成四歳を、式子の猶子にする話がにわかに持ちあがつたのは、式子が百首歌を和歌所に献じて旬日を出ないときである。

守成は、のちに即位して順徳天皇となる人であるが、守成を猶子にして迎え入れるとなると、もとより大炊殿の手入れをしなければならなかった。

式子が、父後白河から遺贈された大炊殿で暮らすようになって四年、内にこもりがちなその性格に加えて種々なる事情から、大炊殿の屋敷内は、風雪がむしばむままに委せてあったのだ。

早速、一町四方もある広い屋敷のあちこちに修理の手が入った。

そしてこれに合わせて内親王家の家司（管

理人）である定家は、内裏に参上して守成の

陪膳（ばいぜん給仕をすること）をつとめはじめ、内

親王家に使える女房や男たちの表情には久々

に明るさが甦ったが、式子その人は初度百首

の詠進、第二皇子の猶子の申し入れ、と緊張

が重なったのであろう、初冬十月に入ると、

誰の目にも一段と衰弱が見てとれるようにな

っていった。

「まさかとは存じますが、昨夏以来の齋院

さまの御病状、よろしくありません。お食事

も召し上がれず、おからだにむくみが来て、

お床からお起きにもなれませぬ」

周囲が心配する中、式子の後見藤原公時は

そう仁和寺の守覚と花園殿の亮子に報じた。

それが今日の、守覚と亮子の大炊殿見舞いと

なったのである。

（つづく）

③ 式子内親王——しよくしなしいしんのうと読

むこともあり

石丸晶子（いしまるあきこ）

東京生まれ、東京大学大学院人文科学
学研究科修了。現在東京経済大学教
授。一九九一年、『式子内親王伝―面
影びとは法然』で第一回紫式部文学
賞を受賞。著書は他に、『法然の手紙』
（人文書院）『お手紙から見る法然さ
ま』（浄土宗出版室）『現代語訳蜻蛉日
記』（朝日新聞社）など多数。

今月の表紙

紅孔雀

蓮

LOTUS

4 月

池の中に蓮華あり
大如車輪
青色には青光あり
黄色には黄光
赤色赤光
そして白色には白光ありて
微妙香潔なり
舍利弗よ
極楽国土には
かくの如くの
功德莊嚴が成就される

蓮華

この不可思議
たとえ七寶池ハ功德水なくとも
小さな泥田に
咲く
美しく咲いて
いる

万葉の蓮

『万葉集』には蓮を詠んだ歌は長歌一首、短歌三首の四首が見えます。
御佩を 剣の池に 蓮葉に 淳れる水の 行方無み わがする時に 逢ふべしと あいたる君を な寝そと …
(巻13 3289)。蓮葉はかくこそあるも意吉麻呂が 家なるものは芋の葉にあらまし(巻16 3826)。勝間田の池は我知る蓮無し 然言ふ君が鬚無きが如(巻16 3835)。ひさかたの雨も降らぬか蓮葉に 淳れる水の玉にあらむ見む(巻16 3837)。仏教伝来以前の蓮はまだ宗教色がなくのびのびと詠まれています。

表紙写真と文

三浦功大

1942年 宮城県登米町生。蓮に関する総合誌「蓮の話」を毎年発行・責任編集(現在3号までに至る)していることをはじめ、展覧会、講演会、その他イベントなど精力的な活動を通じ、蓮を軸とした多くの文化人の結集を実現させ、注目を集めている。主な写真集、著書に「JAZZ in JAPAN 1963-1974」(西田書店)、「蓮の文庫」(カド館)などがある。

人間の知恵と 電脳の知恵

他人事ではない二〇〇〇年問題

千葉・善照寺住職

今岡達雄

コンピュータ二〇〇〇年問題

「Y2K」という言葉をご存じですか。Kはキロで千をあらわします。YはYearの略号ですから、Y2Kで二千年という意味になります。コンピュータの世界で二千年と言うと「西暦二〇〇〇年問題」のことで、これを業界人はY2Kと呼んでいます。コンピュータの西暦二〇〇〇年問題とは、コンピュータを動かすためのプログラムが西暦年号を下二桁に省略して扱っていることに起因して発生するトラブルの総称です。未対策のプログラムをそのまま使用すると、コンピュータでは一九九九年を「九九」、二〇〇〇年を「〇〇」と扱いますから、一九〇〇年と取り違えたり、動かなくなったり、様々な誤動作を起してしまうことになります。

銀行で使っている大型コンピュータから、天気予報を行うスーパーコンピュータ、工場や発電所で装置を動かしている制御用コンピュータ、電話を繋げるための電子交換専用コンピュータ、ビル内のエレベータを動かしているマイコンや制御用コンピュータ、家庭にあるパーソナルコンピュータ、電気炊飯器や洗濯機に組み込まれているマイコンに至るまでコンピュータと名がつくものは全て同じ原理で動いていますから、一つでも未対策のものがあるとトラブルに巻き込まれる恐れが有るのです。

二〇〇〇年になってみると

私どもの日常生活は、私たちが知らぬ間にコンピュータに囲まれて暮らしています。「我

が家にはパソコンもないし二〇〇〇年問題なんて関係ないよ！」とお思になるかもしれませんが、実は大変大きな影響を受ける可能性があります。例えば二〇〇〇年の一月一日を思い浮かべてみましょう。朝起きるとやけに寒いのに気がつきます。確かタイマーでエアコンが入るはずなのと思ってエアコンを見ると、十年前に買ったマイコンエアコンが止まっています。初詣に出かけようと自動車のエンジンをかけようとしたところ、六年前に買った自動車はウンともスンとも言いません。一月三日になって新聞を見ると二〇〇〇年問題の話題だらけ。雑煮も飽きたので明日はご飯にしようとか炊飯器のスイッチを入れると、買ってから三・四年しか経っていない炊飯器のスイッチが入りません。一月四日仕事始めで出勤するとエレベータが止まっていて、みんなが一生懸命階段を上っている姿を目にする事になるかもしれません。これは最悪の予想としてお話ししているのであって、実際にこのようなことが起こることは無いのかもしれませんが。しかし、二〇〇〇年問題への対応が出来ていないと起こる可能性があることなのです。

危険日がいっぱい

実は事態はもっと複雑です。今年一月、日本船主協会の報告では協会加盟の海運会社が行う貨物船5隻に二〇〇〇年問題が発生しました。ある船では世界時間一月一日の午前零時に運転記録装置の電源が突然止まってしまいました。他の船では船の位置を示す電子海図装置が一月一日午前零時に一時的に故障してしまいました。衛星通信が使えなくなった船もあったそうです。これは「九九」という数字を特別な意味（故障、エラー発生）に使用したプログラムを使っていたため、一九九九年になった午前零時に問題が発生した

表 西暦2000年問題の危険日

1999	1月	1日	1999年最初の日
	4月	1日	会計年度で1999年最初の日
	4月	9日	1999年の99番目の日
	8月	22日	GPS衛星の日付がオーバフローする日
	9月	9日	「9999」が入力される可能性がある
2000	12月	31日	1999年最後の日
	1月	1日	西暦の下二桁が「00」となる最初の日
	1月	4日	2000年最初の国内金融機関営業日
	1月	10日	2000年で最初に暦年・日付が7桁になる日
	1月	31日	2000年最初の月の最終日
	2月	29日	うるう日
	3月	31日	2000年最初の第一四半期の最終日
	10月	10日	2000年で最初に暦年・日付が8桁になる日
	12月	31日	2000年の366日目
2001	1月	1日	2001年最初の日
	12月	31日	1年が365日になっているかの確認

嫌われ者の西暦二〇〇〇年問題

一九九九年になっても西暦二〇〇〇年問題が騒がれているのは、その対策が遅れに遅れているためです。西暦二〇〇〇年問題への対応にはプログラムを修正するだけで大変なお金がかかります。それも新しい機能も得られるわけでもなくただ費用がかかるだけです。だから喜んで修正しお金を支出する人や企業はありません。いよいよ何かしなければダメだという瀬戸際になって初めて対策に着手します。コンピュータの西暦二〇〇〇年問題に關しても既に十五年前から問題になることは予想されていましたが、本格的な対応がとられてきませんでした。

先日、米国のクリントン大統領が西暦二〇〇〇年には海外旅行には気を付けるようにという異例の声明を行いました。米国内は西暦二〇〇〇年問題対応が比較的進んでいるのですが、日本を含めた米国以外の国では対応が遅れており、西暦二〇〇〇年一月一日には何が起こるか分からないので旅行には気を付けるようにとの趣旨でした。西暦二〇〇〇年問題とは、一銭もお金を稼がないのに浪費ばかりしている嫌われ者のようです。皆様も西暦二〇〇〇年一月一日には気を付けた方が良くかもしれません。

二〇〇〇年問題に共通することとは

今年の一月一日は最初の危険日でした。これは西暦用の二桁に特殊な意味を持たせたために起こる問題でした。表の中にはそれとは異なる問題も含まれています。

今年八月二二日に予想されている問題は全地球測位システム(GPS)の問題です。自動車のカーナビゲーションシステムにも利用されているGPSですが、実は正確な時計を積んだ米国の軍事用衛星を複数組み合わせたシステムです。複数の衛星時計による時報を電波で受信し、地上に届く時間差から自分の位置を計算します。この衛星は動き出してから週(七日毎)の数を数えるカウンタを持っているのですが一〇二四週までしか計算できないのです。現在のシステムは一九八〇年一月六日午前零時から稼働しており、今年の八月二二日から始まる週で〇週に戻り、日付は一九八〇年一月六日午前零時になります。これに対応したプログラムを使ったGPS利用機器では問題が起きないことが確認されていますが、未対応の機器ではGPSが使えなくなります。これもコンピュータの二〇〇〇年問題に似た問題です。

二〇〇〇年二月二九日の問題はうるう年の問題です。通常、四で割り切れる年号の年はうるう年ですが、一〇〇で割り切れる年はうるう年ではないと決められています。しかし四〇〇年にいちどはうるう年にしないと太陽の運行と暦がずれるそうです。したがって西暦二〇〇〇年はうるう年になります。数十年という範囲で考えますと四年に一度のうるう年で十分ですが、百年単位でものを考えると百年に一度、四百年に一度のことも考えておく必要がある点でコンピュータの二〇〇〇年問題と共通するものです。

コンピュータやマイコンの二桁年号・うるう年やGPS問題は、技術が未成熟な段階で実用システムを作りだした工夫を、技術が成熟したあとでも対策を取らずに放置したことにあるようです。どんな事でも大きな社会問題にならないと動き出さないのが人間社会の習性なのかもしれません。

教訓にすべきこと

今、騒がれている西暦二〇〇〇年問題から私もが教訓にすべきことがあります。「まだ大丈夫」病です。私が西暦二〇〇〇年問題で「西暦年号二桁が問題を生んでるんですよ」と申しますと、多くの方は「西暦の年号なんて最初から四桁とっておけば問題なかったんじゃないの」と言われます。けれども現在のコンピュータやプログラムの基本仕様が決まった二五年前にはコンピュータやメモリーの値段は現在の一万倍もしましたから節約をはかるのは当たり前、限られた技術資源で実用システムを作り出すための貴重な工夫だったわけです。西暦二〇〇〇年もまだ二五年前でしたし、コンピュータの寿命は五年から六年でしたから、次の更新時に修正すれば十分対応できると考えたに違いありません。

しかし、次の更新時にもまだ二十年あるからと考えたのが間違いの始まりです。その次もまだ十五年有るから、その次もまだ十年有るからと現在にいたってしまったわけです。ここから得られる教訓は「まだ大丈夫は、もう危ない」です。対策を講じなくてはいいけないと分かっている問題に対して解決を先延ばしにするのは止めましょう。早くに対策を講じておけばそれほど大きな問題ではなかったのですが、二十年以上も先延ばしにしたお陰で大きな社会問題になってしまったわけです。

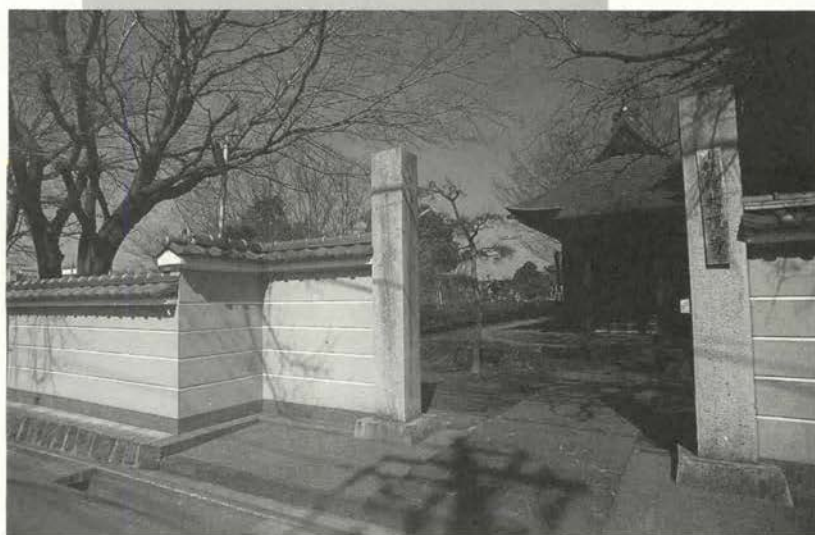
ところで、皆様も先延ばしにしていることは有りませんか、枯れて倒れそうな境内の木とか、雨漏りしている本堂の屋根とか、画定していない隣地と境内の境界とか、懸案の墓地整理とか、寺の跡取り問題とか、対応が遅れると西暦二〇〇〇年問題の二の舞ですよ。

寺院紀行

富士宮

大頂寺

撮影／タカオカ邦彦
文／真山 剛



大頂寺山門。現在新しい山門を計画している

「くやし涙があふれる中、何でこんなになったのか。最初はそう思いました。でも、ダメな時はダメだとあきらめたら『そうか、向こうに行けば親父に会える。お袋にも会えるんだ。それに祖父や祖母だっている。そうしていずれまた妻や子供たちにも会えるんだ』と思えてきたのです。」

それから、まさに一期一会、会える時に会える人と会おうと、よく出かけるようになりました」

大頂寺の住職、石井真也上人はガンを告知された時の心境を静かに、言葉を一字一字確かめるようにこう話してくれた。その顔は優しく穏やかで、ガンと闘っている様子はどこにもない。

「あと1年、もって2年だったのがもう、2年目に入っていますから、もしかしたら治つてるかもしれないよ。いや、治つてなくとも法然上人が言われたように、病と仲良く生きていきますから」

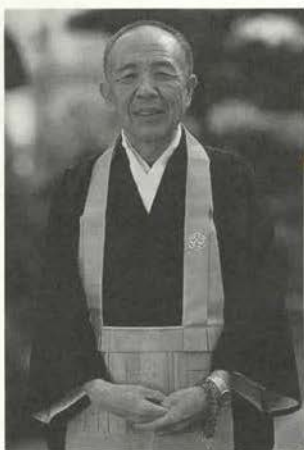
住職はこう言うのと、にこやかに笑った。その笑顔がまた素晴らしい。何の術（て）いも、強がりも、そして嫌みもない。無理なく自然に表情が和んでいく。

今度の取材のお寺さんはガン患者さんですと編集部から聞き、ちょっと憂鬱な気持ちで山門をくぐったが、住職と話し始めると、そんな気持ちは瞬く間に消え失せた。むしろ死をすでに自分の中に取り込んで、生死相まって仲良くやっている住職に言いようのない魅

明治時代の大頂寺の風景



第千四世石井真也住職。昭和五年生まれ



力と、一体どうして、という興味が湧いてしまった。

しばらくして奥様も一緒に取材に応じてくれた。

「とても痩せましてね。でも細くなったら、むしろ昔の方が太っていて病気みたいに思えますよ」と奥様もくったくなく笑われる。

単なる入院なら妻や娘が毎日お見舞いに来るわけがない、と住職に変に思われたほど病院に通った奥様に、いまでも心配が残っていないはずはない。だが、微塵もその心配が無いのは、奥様もすでに住職が悪い状態から抜け出しつつあると確信しているからだ。

かつて、誰でも明日の自分がどうなるかもわからないのに、平気で先の約束をしている。どうしてでしょうね。という話を聞いたことを思い出した。これは、いまや死が身近でなくなってきたことの裏返しに過ぎない。しかし、生老病死、仏教の教えはこの死を忘れてはいない。むしろ死に向かって生きていくことを説いている。石井夫妻はその教えに間違いなく触れているに違いない。

さて、石井住職はこの四月に大本山増上寺の御忌の唱導師の大役を果たされることになった。御忌とは浄土宗の開祖、法然上人の追善供養の行事で、浄土宗挙げての最も大きな行事である。

石井住職は法然上人に、その病と仲良く一緒に生きる教えを自らが実践し、上人への供養という形でお礼を申されることになるわけである。石井住職のお寺のある富士宮を中心とした浄土宗岳陽組の

昭和二十五年大正大学野球部の面々。
中段右端が石井住職



団体参拝が当日あるという。おそらくその前で石井住職は唱導師という大役をさらりと果たされるに違いない、取材も終わろうかという時になぜかそんな住職の姿が目に見えた。

御忌の唱導師は七條袈裟という立派な袈裟と水冠を身につける。

石井住職もちろん身につけるが、それはかつて祖父が明治四十三年四月二十四日に同じ増上寺での御忌で身につけたものだという。

当時は、御忌の唱導師には増上寺から水冠と弘子が授与されたという。石井住職の祖父、大頂寺第二十二世石井了覺住職が拝受したその水冠を被り、同じ袈裟を身につけての晴れ舞台である。当時の御忌の写真が大頂寺に残っているが、こうした話を聞くとやはりお寺には何か言いようなない時間が流れているような気がする。

お寺の歴史に移ろう。

大頂寺は一五五六（永録元）年、正蓮社定譽助諦上人が開山した浄土宗寺院で、駿州富士郡浄法山正定院大頂寺と記録には残っている。現在の住所は富士宮市東町で、富士宮駅から歩いて七分ぐらいである。富士の麓にある境内からは霊峰富士が見える。

大頂寺という名前を分解すると、大きな頂きの寺である。大きな頂きとは富士のことに違いないが、それを今に伝える資料は残っていない。しかしおそらく富士を意味する寺名をつけたのだろう。

大頂寺の寺宝のひとつに大日如来の座像がある。明治七年に配仏

明治四十二年四月、第二十二世了覺上人の御忌での祈念写真



大正十五年、元檀家総代の家から出てきた古文書



毀釈で富士山の至る所にあった仏像が取り除かれているが、富士山の頂上に安置されていた大日如来が中屋という家を経由して大頂寺に移ったものである。

廃仏毀釈で名前がほとんど変わってしまったが、かつての富士は釈迦の割石、薬師嶽、阿弥陀窪、大日堂といった仏たちの名前のついた地名ばかりであった。そして数多くのお堂が建ち、仏像が祀られていたのである。そうした仏教色が少し薄くなったのは、江戸時代中期に全盛を迎えた富士講などで、御師の祈禱が多くなったからだという。当時はもともと富士への登山道として開けた南の駿河から、北口ににぎわいが移った頃である。

さて、大頂寺は人の流れが北へ移る前のにぎやかな頃、村山と呼ばれる登山の前泊所へ向かう道すがらに位置していた。

いまも咲花町商店街から続く参道は、細くはあるがそこから本堂までの距離は長く、裕に百メートル以上はある。現在、その道を隔てたところにある宗心寺はかつての大頂寺の第七世が開山となった寺である。宗心寺の建立は千六百年代の初頭と伝えられているが、大頂寺との関係は深く、大頂寺に住職がいなかった時期に法然上人の名号や熊谷直実の消息の写しなどの多くの宝物が大頂寺から宗心寺へと移っている。

古文書に残るそうした無住時代はともかく、大頂寺には將軍から

宮町にある富士山本宮浅間神社の湧玉池



富士宮の観光地、白糸の滝



の朱印状が残されていることから、おそらく富士の南面の浄土宗寺院として徳川の比護を受けて権勢をふるっていたに違いない。明治三十四年に大改築をおこなっているものの間口九間、奥行き八間という立派な本堂は一六四八（正保四）年建立という。境内の六地藏も同じ江戸初期のものである。こうしたものがその歴史を物語っている。

さて、その大頂寺の歴史の中でユニークな住職がいる。現住職の父だった第二十三世眞峯上人だ。

現住職によると、「舶来坊主」と呼ばれ、後年鎌倉の光明寺の法主となられた時には、なんと仏英会と呼ばれる「仏教英語と英会話の会」という会を催したという。

大頂寺にももちろんその面影は残っている。読者は気付かれたであろうか、巻頭のカラー写真の本尊の上にぶら下がっているシャンデリアを。眞峯上人の発案だ。早稲田大学からワシントン大学、コロンビア大学と学ばれたという明治二十六年生まれであるから、きつと筋金入りの「舶来坊主」だったに違いない。

とはいうものの現住職の眞也上人も、もとは英語の先生だった。大正大学に入ったものの文学部英文学科。お寺の息子の多くは浄土学、または仏教学だった中で、の英文学である。卒業して半年して小学校の先生から中学校の先生となり、五十五歳の退職まで、三十二



平成元年の大頂寺五重相伝会の記念写真

年間教壇に立たれていた。やはり血筋は争えないのである。

その父から受け継いだものがまだ他にもある。その一つがハガキ通信と呼ばれる檀信徒へのメッセージだ。最近は病気のこともあつて、毎月とはいかないというが、それでも出し続け、現在三百二十号を数えている。

そのハガキ通信の平成三年八月三日号に、冒頭の法然上人の教えが書かれている。まだガンとは無縁で恰幅良かりし頃のものながら、住職の気持ち^にが滲み出ている。最期にその一文を紹介しよう。

「『されば念仏を信ずる人は、たとえいかなる病をうくれども、みなこれ宿業なり』と宗祖法然上人は申されました。即ち病に感謝せよ、と云うことです。病氣になった時、うらみごとを云わないで、むしろ仏の恵みと有難く受け止めなさい、と。わたしも十五年程前、九十九日間入院生活をしました。病氣になるのはいやなもので、痛みがあつたり、身体は衰弱するし、金にかかるし、愚痴の一つもこぼしたくなるものです。しかし病になって寝てみると、日頃多忙で見失いがちな自己を反省する良い機会を与えてくれるのも事実でした。

(以下略)

今まさに、石井住職はこの法然上人の教えに導かれ御忌を迎えられている。四月七日の法要の感慨深さは石井住職にしかわからない。

(ルボライタ！)

1676年頃の作と思われる六地藏尊



先代が法主となった光明寺の書院を模した書院



東海道 五十三次を 歩いて

原田 功

老いてなお
童の気持ちを持った仲間
四人で東海道を
歩きだした

1、老童4人のんびり旅

子供の時、探検ごっこをよくやった。行ったこともない所を歩くのがとても楽しかった。今、東海道五十三次を歩きながらそのような子供の時の気持ち思い出して楽しんでいる。

2年ほど前から老人仲間4人で東海道五十三次を歩きました。4人とも教職を定年退職し暇はたっぷりであるがまだまだ元気である。好奇心も旺盛で変わったことが大好き、老いてなお童の気持ちを持った面々である。

グループ行動をする時、4人グループというのはちょうど良いような気がする。5人だと他人任せが生まれやすいし、3人になると何か物足りなさを感じる。私たちは調査・計画・時刻表・会計・宿泊等の役割を分担した。それぞれに責任を持ち、他の物は信頼し従うという原則が知らず知らずに生まれた。4人いれば、だれかが病気をしたり怪我をしたりすることもあつた。こんな時は回復を待ち、必ず4人揃つてから行動した。登山には「弱い人に合わせる

事」という原則があるが、私たちもこの原則を守っている。

4人の日取りを調整しながら歩いているので歩き始めてから2年もかかってしまった。しかし欲張らずにのんびりと歩いている。現在、関まで歩き、あとは鈴鹿峠を越えて草津・大津を経て京都に入る予定である。

私はこの徒歩旅行をする事によって、歩けることの幸せを感じると共に、積極的な生活意欲（刺激）を与えられている事に心から感謝している。

2、広重の絵

東海道に関する資料や案内所は多数ある。その中で私たちの旅を特に面白く豊かにしてくれたのは広重の「東海道五十三次」であつた。広重がどこでその絵を描いたのか、その場所に立つてみるのは実に楽しいことだつた。私たちは宿場毎に広重の絵の場所を特定することを一つの課題にした。

「ここだ。！」

と、皆が声を発し、よく判ったのは「神奈川」「台の景」だった。京浜急行の神奈川駅西側の青木橋を渡ると坂道になり右側が山で左側が低くなってビルや住宅が並んでいる所を通る。ここが広重の描いた「神奈川」の場所である。左側の低い所は海だったのである。ビルや住宅は無いものとして海に見立ててみると、絵にそっくりになる。この海は袖が浦と言つて風光明媚の所だったそうだ。私たちは

「なるほど。ここだ。ここだ。」

と、大発見をしたように、絵と実景を交互に見比べていた。道の左側には今でも料亭がある。昔は立場茶屋だったのだろう。広重の絵では旅人が4・5人坂を登って行く。茶屋の女に袖を引かれている人もいる。ここに立ってみると、広重の絵のように茶屋の女の呼び込みの声が聞こえてくるような気がする。広重が立って描いただろうと思われる角度から、私たちも写真を撮る。

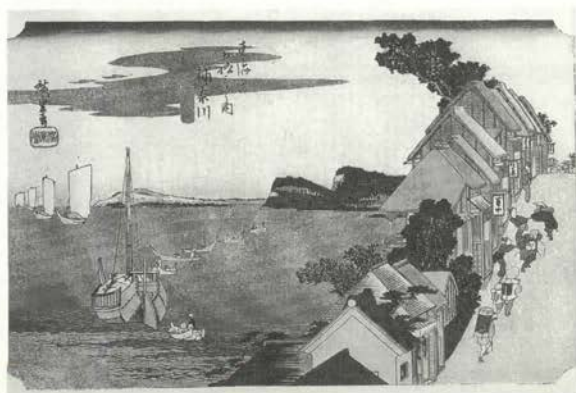
広重の絵にそっくりの場所のもう一つは、由井の

薩埵峠である。薩埵峠は由井の宿場を一里ほど過ぎた所にある。峠に立つと、前に駿河湾がひらけ、その彼方に伊豆の山々、左に田子の浦の渚が長い曲線を描き、その上に秀麗な富士山が姿を見せる。右を向けば清水港、その先に三保の松原が霞んで見える。広重はここから由井「薩埵峠」を描いたのである。

絵を前にして見比べると坂や山の斜面は強調して描かれているが、実にそっくりである。広重はこの辺で腰をおろして描いたのだろう。私たちもその辺りで腰をおろして眺める。広重と同じ感動を今私たちも体験している。そう思うと広重が遠い昔の人でなくなってくる。

その外に現地に立って広重の絵から昔を如実に想像できたのは、白須賀、鞠子、日坂、御油、石薬師などが上げられる。それらの絵を現地で見比べると、広重という画家はデッサンの力もたいへん優れていた事がよく解る。

『東海道五十三次』には、その場所を特定出来ない絵もある。そのような絵は場所がどこかと詮索して



神奈川宿
広重の絵の場所

も意味がない。場所は問題ではないのだ。

有名な蒲原『夜の雪』の場所はJR新蒲原駅に近い所で、広重『夜の雪』碑もあるが、この絵に描かれた東海道の淋しさはつゆもかけらもない。風景も合致するところがない。しかしこの絵を見てみると、旅の寂寥をひしひしと感じさせられる。広重は東海道の風景と共に「人の世」を描いているのだ。昔の東海道の旅はこんな淋しさもあつたんだなあと思う。なにやら無常感のようなものも漂ってくる。昔の人は芭蕉ならずとも多くの人が旅に人生を重ねていたようだ。蒲原の宿場跡に立ち、この絵と見比べてみると、時代の違い、人の内面の違いが一瞬に感じられる。その時の人の内面までも描き残した広重という画家はすごいと思う。

庄野『白雨』も有名な絵である。この絵から連想する庄野は、山道の淋しい所であろうと想像していた。来てみると、何の変哲もない静かな住宅地の道だった。旧東海道の面影は残しているが人通りもなく平坦な道である。広重の絵の場所はこの宿場では

ないように思われる。宿場からはずれた山道だったかも知れない。しかしこの絵も場所を特定することは無意味である。広重は庄野であつた白雨『俄雨』の情景を表現しているからだ。絵を見てみると、雨の音、竹林のざわめきが聞こえてくるような臨場感がある。俄雨にあわてる人の動きが、手や足の先まで鮮やかに表現されている。広重は実に優れた画家であるところでも感嘆する。

広重の「東海道五十三次」の画集は重かったが、これを携えて歩く事で、私たちは、言葉以上に昔の旅の情景や過去の人の心を思い描きながら歩く事ができた。

3、人との出会い

老童4人組は、いかにも東海道を歩いていますよ、という格好である。リツクを背負い、ハンドブックを持ち、軽い靴を履いて、本を見てはキョロキョロと何かを眺めながら歩いている。我々のこのような姿を見て、たいいていの人は親切であつた。しかし、

大きな街では物を聞いてもぶつきらばうで、写真のシャッターを切るのを頼んでも引き受けてくれる人は少ない。暗い顔をしている人が多い。

「この道が旧東海道でしょう？」

と、話し掛けると、

「そうかね。」

と、そつけない。働いている商店の人に聞いても、自分の店が旧東海道にある事を知らない人がいるのには驚いた。

川崎の市街地を抜け、八丁堰を過ぎると道は狭くなり、屋根の低い家も見られるようになる。鶴見市場という所に一里塚があった。江戸から5番目の一里塚である。塚らしき盛り上がりがあり、稲荷社が祭つてある。大切に保存されている感じである。道の向い側にも塚があったはずだが、そこは平地で床屋さんだった。

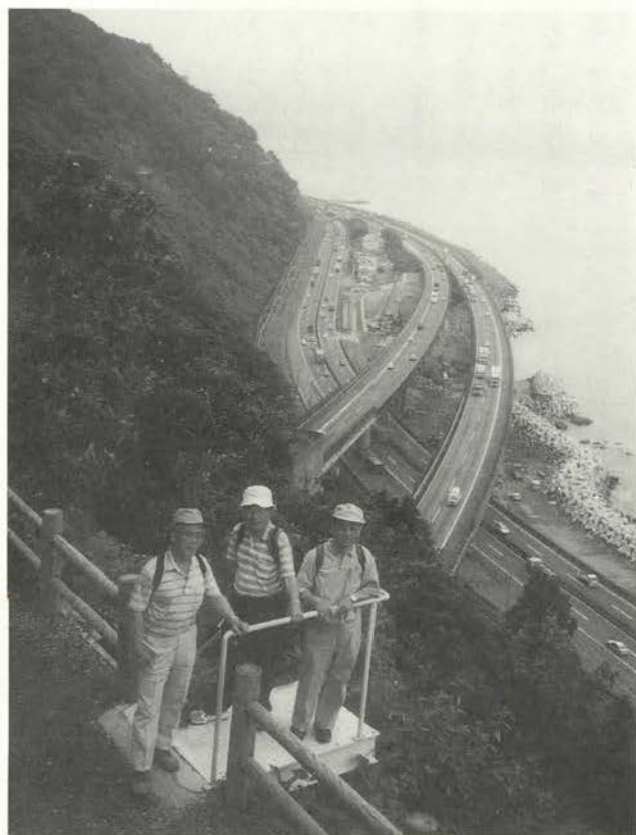
「一里塚は、道の両側にあるんだよね。だから、ここにも塚があったんだらうね。崩して住宅地にしてしまったんだね。」

と話していると、床屋のおかみさんが出てきて、「そうなんですよ。こちら側にも塚があったそうです。」

と説明してくれた。気さくな人で、わざわざ古い写真などを出してきて見せてくれた。その写真によると、大正時代までは大きな榎があったようである。おかげで一里塚の本当の姿を想像することができた。おかみさんは一里塚の跡に住んでいることが誇りでもあるらしい。一里塚の片側を壊した人はこの床屋さんではないだろうが、見学者に親切なのは、遺蹟跡に住んでいる事の罪ほろぼしの気持ちなのだろうか。無邪気で親切な人が住んでいる事が慰めだった。

大井川を渡ると金谷の宿。この先牧ノ原大地を越えれば菊川にたどり着くはずである。菊川あたりでちようど日が暮れるだろうという計算で、菊川町商工課に電話をかけて菊川の町の中で手ごろの旅館を紹介してもらった。『たちばなや』という旅館である。

「4人様ね。空いていますからどうぞ。」



薩埵峠

という返事をもらい、安心して歩きだした。お茶畑の牧ノ原大地を越えて菊川におりた。山間の小さな村落である。人通りもなく、農家のような家ばかりである。村落に入った所で若い奥さんらしい人に、「『たちばなや』はどこですか」と尋ねた。すると、

「ここには、旅館などありませんよ。」

と言うのである。

「でも菊川の『たちばなや』という旅館で、予約もとつてあるのですよ。」

と言うと、

「ああ、それじゃ南の方に菊川町と言う所があるから、その事でしよう。」

という事で、我々は重大なミスをしている事が判つた。ここは金谷町の菊川村落。菊川町というのは、ここから5キロも離れた場所で東海道とは縁もゆかりもない所なのである。

日は暮れかけるし、くたびれていて、これからとも5キロは歩けない。道はもつと長いという。タクシーもこんなひなびた所では通る筈もない。タク

シーを呼ぼうにも、どこに頼んだらよいか分からない。万策尽きて近くの農家に入りこみ、主人にタクシーを呼ぶ事が出来ないかと聞いてみた。

この農家のご主人がとても親切な人で、自分の電話で金谷のタクシー会社に電話をかけてくれた。金谷は、越えてきた牧ノ原台地の向こうで3キロも離れている。タクシーが来るまでしばらく時間がかった。その間、お嫁さんらしい人が

「疲れたでしょう。」

と言って、冷たい水をご馳走してくれた。ご主人は我々がタクシーを待つ間いろいろと話をしてくれた。「わしのおばあさんは、明治天皇がここを通つた時の事を話してくれたよ。みんなひれふしてお送りしたそうだよ。」

「この川は菊川という有名な川だが、この水は飲めないんだよ。台地の向こうの大井川から水道で引いた水を飲んでいるんだよ。この広い台地がみんな茶畑で農葉が菊川に流れこんでくるのでね。」等々。

この菊川は宿場ではないが、金谷宿と日坂宿の間の小夜の中山・中山峠の下にあり、登り下りのしば

しの休憩所つまり立場であった。鎌倉幕府を倒そうと図った貴族藤原宗行は捕われて鎌倉へ送られる途中にここで殺されたという。またその100年後、北条氏を倒そうと暗躍した日野俊基も捕らえられて同じ運命をたどろうとする時ここを通って

「いにしえも かかるためしを きくかわの 同じ流れに 身をや沈めん」

と、詠嘆したという。社会の進歩からとり残されたような小さな村落であるが、東海道の道筋にあって、それなりの歴史を刻んできた所なのである。

見ず知らずの人に親切にするのは昔からのこの土地の気風なのかも知れない。始めに会った若い奥さんといい、この農家の主人といい、嫁さんといい、みんな親切であった。旅先で受ける親切は身にしみて有難い。

タクシーが来て、菊川町の『たちばなや』をやつと探しかけた時は、すっかり暗くなっていた。

後日、再び菊川を出発点として東海道の旅を続けるために訪れた時、私たちはわざわざかりのお礼の品物をお世話になった例の農家に届けてから、中山

峠に向ったのだった。さわやかな気分だった。

東海道五十三次の道筋には、奇特的な説明好きの人がいる。由井の茶屋跡『望嶽亭』のご老人は見学の人を待ち構えていて、長い長い山岡鉄舟の話をする。山岡鉄舟は、西郷隆盛と会談するために駿府におもむく時にここに泊まったのだそうである。反対派の襲撃があつて、際どく逃れた時の抜け穴が地下に通じている。その抜け穴を見たいのだが、なかなか見せてくれない。一通りの話が終わらないと案内してくれないのである。無料で見学させてくれるから、こちらの勝手は出来ないのだ、がまんして聞くしかない。この方は町の役職などをいろいろと務め、いまは隠居の身で、山岡鉄舟の話をするのが生き甲斐なのである。絵も達者で、『東海道は日本晴』という戯画集を出版している。立派な本なので1800円もする。お礼のつもりで買ってから失礼した。

東海道と真ん中、袋井宿を訪れた時は朝だった。袋井は江戸から数えても京から数えても27番目の

宿ということ、「ど真ん中」なのである。私たちもやれやれやつと真ん中だという訳で、手製のポスターを広げて記念の写真を撮ったりしていた。すると、クリーニング屋の軽トラックがすつと泊まって、運転の男性が盛んに手招きしている。

「あげたい物があるから来てください。」

というのである。案内されるままについていくと、クリーニング屋だった。クリーニング屋であるが、店の半分は東海道の資料やグッズのようなものが所狭しと置いてある。この人は、袋井の宿場跡を訪れる人に資料やグッズを頒けたりしてサービスをしているのである。なかなかのアイデアマンで、「東海道袋井宿通過証明書」という物を発行している。あげたいというのはこの証明書だった。これは気の利いたサービスである。東海道歩きの旅行者をよい気分にさせてくれる。

「ここに来る人が喜んでくれるからやっているんですよ。」

と言う。この人も話好きで、明るく楽しい人だった。

東海道五十三次を歩いていると、このような「いい人」達に出会う。それは都会よりも地方の方に多い。大体すこしお節介で親切で世話好きである。このような人達と出会うと初めから心を開き、気楽に喋り合える。心が和み、人間らしさを取り戻した気持ちになる。このような「人」との出会いも、東海道歩きの一つの楽しさである。

(元公立小学校校長)

御法語に聞く

念仏申さんもの十人あらんに、たとい九人は臨終あしくて往生せずとも、我れ一人は決定して往生すべしとおもうべし。

【つねに仰られる御詞】

お念仏を称える人が十人いるとして、たとえそのうち九人までもが臨終に（阿弥陀さまの本願を疑つてしまい）心が乱れて往生できないとしても、この私だけは必ず往生を遂げるのだと思ひ定めるべきです。

往生は唯我独尊で

四月八日はお釈迦さまの誕生日。全国の寺院で、お釈迦さまのお誕生をお祝いする「花まつり」がさまざまなに行われます。

ハイライトは何と言っても甘茶かけ。ご誕生の時、歓喜の雫が、天上からお釈迦さまの頭上に流水が降り注がれたという故事に習って、嬰兒のお釈迦さまのお像に、頭上から甘茶をおかけいたします。とりわけ小さなお子さんが、お母さんに手を添えられながら甘茶をかけるまなざしは、なんとも愛らしいものですし、あるいは母の手を振りほどき、一人でできたしと得意げになる笑顔もたくましいものです。お釈迦さまの伝記によりますと、お釈迦さまがお生まれなるや否や、右手で天上を、左手で大地を指しつつ「天上天下唯我独尊」と宣言なされました。ご承知の言葉ですが、文字面だけを読み込みますと「この世の中で私一人だけが尊い存在だ、一番偉い」と理解して、「自惚れや思い上がりではないか」と訝ってしまいいそうです。

松原泰道師は常々この言葉を「かけがえのない、たった一人の自分だからこそ尊い」「かけがえのない一人ひとりの中に如来の智慧が

宿っている」と、人間の尊厳という視点で語っておられます。誰の命も最高に尊く、比べようがないということなのであります。

さて、さまざまな伝記からその前後の言葉を拝見いたしますと、「この身今生に必ずや仏となり、迷える衆生を覚りの世界へと導こう」というお釈迦さまの決意が読み取れます。他の誰でもない、「この私」が仏を目指す。かけがえない私の人生だからこそ、あえて仏になりたい。「唯我独尊」には、そうしたお釈迦さま自身の「この私」という自覚が込められていると思うのです。

そして法然上人もまた、念仏往生においても「この私」という自覚が大切なのだとおっしゃるのです。無論、万人平等の往生をお約束下さった阿弥陀さまをお慕いする私たちですから、人を蹴落としてまで往生せよ、ということではありません。

他人さまの往生が叶おうと、叶うまいと、そうしたことを気にしたところで、自身の往生には何の足しにもならない。あなたの代わりに誰かが往生してくれたとしても、実際、何の意味があらうか。

「この私」の往生が叶うか、どうか。私こそ往生を遂げる身である
と自覚することが念仏往生を願う者の心構えである。法然上人は、
そうおっしゃりたかったのではないでしようか。

もし仮に誰かが「あなたが不幸なのは、病気なのは、あなたの何
代前のご先祖が成仏していないから。なにがしかの供養をして成仏
させてやりなさい。さもないければ、あなたの往生など叶いようもな
い」と言ったとしましょう。ご先祖を尊び敬い、心を込めてご供養
することは子孫として当然のことです。しかし、ご先祖の成仏と私
たちの極樂往生とは、何の関わりもありません。ご先祖の成仏は御
仏がなさる業。私たちは自分の往生だけを考えていればいいのです。
一人ひとりが「唯我独尊」と断言したお釈迦さまのみ心を仰ぎつ
つ、「この私だけが往生を遂げる」と揺るがぬ自覚を持った時、何も
のにも惑わされない「私たち」がいるのではないでしようか。お互
いかけがえのない人生を敬愛し、一期一会の出会いを尊ぶ一生を目
指したいものです。

（浄土宗総合研究所 研究員 柚山栄輝）

Q

&

A

読者の疑問に
大室了皓師が答えます

仏教相談

Q

お墓に上げた御供物は持つて帰るの？

地方に嫁いでいる四十代の主婦です。

先日、久しぶりに東京へ行き、そのついでに祖母のお墓参りに行きました。

本堂にお参りし、お線香をいただき、そして墓地に行きましたが、その入口に「お墓にあげた御供物は、お参りがすんだら持つて帰って下さい」と書かれた看板が立っていました。せっかく、おばあちゃんに食べてもらおうと、子供たちとおばあちゃんが好きだったものをたくさん買って来たのに、ほんの数分の御参りがすんだら持つて帰るなんて、おばあちゃんがかわいそうな気がしましたし、また、もって帰るのも荷物が増えてたいへんでした。

どうして持つて帰るのですか。また、こうした時はどうすればよいのでしょうか。

御参りが済んだらお下げする

私の寺でも、お墓にお供えになるものに頭を痛めています。その理由は、

一、生ま物のお供え

ア、数日すると、腐敗して異臭が漂い、お墓が汚れ、不衛生になって隣のお墓などに参詣される人に不快感を与える。浄域であるべき墓地環境を壊してしまう。参詣の後に雨が降ったら、なおさら惨めである。

イ、生ま物以外の食物

生ま物ほどではないが、時がたつと同じようなことになる。

ウ、お酒やビールなど

夕方になると、浮浪者が墓地に入り込んでこれらを飲み、酔って寝込んでしまうことさえある。

特にお彼岸やお盆には、参詣の人が多いので、それを知って入り込む。

寺に人出の少ない時刻には、何をされるか分からないので、おとなしく出ていってもらうのに苦労する。

女性では容易に対処できない。

最近では、一見してサラリーマン風の男が昼間であっても堂々と入り込む。

線香も花も持っていないので不審に思っ
て飛んで行くと、

「墓参りに来た」と言う。中には何も持っていない人もいるので、親戚の人だと失礼になる。そこで更に尋ねる。

「〇〇さんのお墓にですか」

その〇〇さんとは檀家には無い名前である。

「そうです」殆どの者が言う。正体がバレたところで、穏やかに追い出しにかかる。

殆どがお酒やビールが目的である。

二、鳥の被害

お墓の綺麗な花でも散らかし放題だが、特に食べ物を食い荒らすのは凄まじい。数十羽が群がって舞い降りるのを防ぐの

は容易ではない。

三、どうしても良いでしょうか

ア、お供えた物は、御参りが済んだらお下げする。

イ、そして「ご本尊様にお供えして下さい」とお寺にお願いする。

綺麗に包装されたお供えなら、きつと願いを聞いて下さると思います。

そう出来れば、おばあちゃんも喜んで下さるでしょうし、お参りする貴方がたも安心なさるのではないでしょうか。

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六一五—〇八八四
京都市右京区西京極郡町一〇三番地三

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五—三一四—七七六八
FAX 〇七五—三一五—三七五三

四月といえば御忌です。御忌

とは浄土宗元祖大師法然上人の忌日法要。全国各地で行われますが、特に知恩院、増上寺の法要は盛大で名高いものです。

冷々と畳広さよ御忌の鐘

清原枘童

花の季節といっても、まだ寒い日があります。実感の一句でしようが、もともとの御忌は陰暦一月十九日から二十五日まで祥月命日に合わせて行われてい

たことを思いださせます。

群衆する人を木の間に御忌の寺

高浜虚子

御忌には本当に沢山の人が参集します。京都では御忌詣をその年の最初の遠足のように考えていて、弁当始めともいったそうです。また参詣の人々が美服を競ったため呉服屋は御忌詣の衣装を見てその年の流行を定めたほどであったといえます。

御忌

ぎょき

御忌戻り小袖たゝむや京の宿

水落露石

御忌小袖とはまさにその衣装のこと。賑やかで楽しい行事として定着していた様子がよくうかがえます。それに対しあえて「木綿たふとぶ法然忌」などと詠んで、華美な様子を少し批判的な目で見た句も当然あるから余計に面白い。

いずれにしろ春のはじめの大イヴェントであったことを証明しています。

FORUM
浄土の広場

「浄土の広場」では
読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●余寒

〔特選〕
余寒なほ声落しゆく夕鴉

小林恵美

●春が立つても寒さは去らない。ねぐらに帰る鴉も声を落として行くように思える。少し季語にもたれた感はないが、ウ・オ段音の多用と長音等によって、内容に見合った暗く重たい気分を得ることが出来た。

〔佳作〕 好天に車椅子押す余寒かな

上野明達

魚市場競り声余寒寄せつけず

細田初枝

カーテンに透きし余寒の雲の色

増田信子

●彼岸前

〔特選〕
座布団を干して子等待つ彼岸前

蘭田郁子

●「彼岸」でなく、「前」がついた分むずかしかったのだろう。季語につきすぎたものが多い、逆に離れようとすると、ほかの季語でも

増田河郎子・選

よくなった。つかず離れずというのは、何ともややこしいものである。

〔佳作〕無住寺に人の気配や彼岸前

細田初枝

彼岸前都知事候補の顔幾つ

蠟山吉宣

父の墓石積み直す彼岸前

北川弘子

●自由題

〔特選〕

坂東太郎渡りてふぐりおとしかな

佐藤雅子

●四十二の厄に氏神に参拝し、ふんどしを落として来る。利根川を渡ってというのがふんどしと一緒に、眉つばくさくなったが、「坂東太郎」を持つてくることで、実におおらかで心はずむ作品になった。

〔佳作〕春光や茶杓の艶のみづみづし

野口義雄

春浅し浜にごみ焼く火の見えて

島谷ときを

大寒の身振ひひとつ葬終る

平川とおる

第六回 浄土誌上句会のお知らせ

季題
花

風船

自由題

×切・四月二十日

発表・『浄土』六月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

●いずれの題とも何句出しても可

●特選各1名・佳作各3名

応募方法

葉書に俳句（何句でも可）を書き、住所、氏名を必ず忘れないで下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

☆まちがいは7ヶ所あります。



『私、藤井の新刊が出ました。「まんがでおぼえる囲碁入門（山海堂）」という本です。書店で注文してね！』

まちがいをさがし

答えは48ページにあります。

急告——層の「理解と」支援のお願い

新生『浄土』からまる6年、会員の皆様には何かとご援助、ご協力を賜り、スタッフ一同会の発展はもとより本誌『浄土』の充実のために努力して参りましたが、消費税アップに伴うさまざまな負担が限界に来てしまいました。現今の不況下において会費値上げも致しかねる状況にて、止むをえず今月号よりページ数を大幅に減少致して、非常時の困難をのりきる所存であります。その分誌面の内容刷新をモットーに、編集部一同頑張つて参りますので、何卒事情ご賢察の上一層のご支援のほどお詫びかたがたお願い申し上げます。

(編集人 宮林昭彦)

さまざまな思いを載せて桜散る

芭蕉の名句に似すぎてゐるなどという批判は置いて、桜はやはり散る鮮やかさを誇る花だと思ふ。

四月は日本においては新たな出発の月というイメージが大変強い。その門出に、見事に散る桜の花見をするのは何とも理屈がつかないおかしい感覚を感じるのは、私のひねくれた性格からであろうか。

日本人が昔からお祝いに欠かせないものとしたのは「松・竹・梅」の三木であった。これらに共通していえることは、寒気に強いということだ。どんな苦しい状況の中でも青々と、いきよいよく、そして花を咲かせるということだろう。

こうした理屈に合う見事さを、かつての日本人は愛したということをもう一度確認したくなった。そしてこのことを現在本誌が経済的に大変厳しい状況下にある中でも、いい本を作っていくことを心がける支えにしたい。

(代潤)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川代潤
斎藤晃道
村田洋一
井原法正
佐山哲郎
間川彰道

編集顧問

大室了皓

浄土

六十五巻四月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷——平成十一年三月二十五日
発行——平成十一年四月一日

発行人

編集人

印刷所

株式会社 シーティーイー

真野龍海
宮林昭彦

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話〇三三・五七八・六九四七
FAX〇三三・五七八・七〇三六
振替〇〇一八〇・八八二・一八七



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷注意



落石注意、静かに



落下注意



低空飛行



出口



落下注意

住友海上

代理店

安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



禁煙



fragile



安全マーク



児童注意



落下注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)

ご注文・お問い合わせは
法然上人顕仰会まで
電話: 03-3578-6947
FAX: 03-3578-7036(24時間)

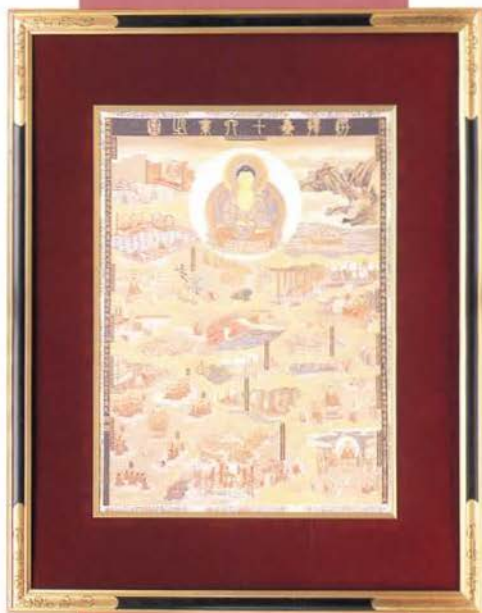
お仏壇用
宗旨布教額も大好評
発売中

大(320×183mm) 735円より

私たちの宗旨
名稱 淨土宗
宗祖 法然上人(源文)
開宗 永治元年(寛治二十五年)
本山 阿彌陀佛(蓮華寺)
稱名 南無阿彌陀佛
教え 浄土作伴・本位よりついでに
お経 浄土三昧經・無量壽經・
名號經
菩提寺 宗正寺・蓮花寺

小(273×142mm) 420円より

私たちの宗旨
名稱 淨土宗
宗祖 法然上人(源文)
開宗 永治元年(寛治二十五年)
本山 阿彌陀佛(蓮華寺)
稱名 南無阿彌陀佛
教え 浄土作伴・本位よりついでに
お経 浄土三昧經・無量壽經・
名號經
菩提寺 宗正寺・蓮花寺



選擇集がよく解るお絵解き
選擇集十六章之図

遂に
完成

布教用グッズとして
念仏の教えを語るのに
最勝の選択

本堂・客殿に最適 豪華額装入り
(585×465mm)

頒価20,000円(税・送料別)
解説書付き

※お届けまでに四週間ほど
かかる場合がございます。